

## 総 説

# 「授業評価」とは何か – その背景と課題について – What's the Class Evaluation System: The background and tasks

押 木 利英子\*

新潟リハビリテーション大学 副学長  
大学院リハビリテーション研究科 教授

キーワード：授業評価, 教育評価, 教育改善, 授業づくり, 3つのポリシー

**要旨** 大学の教育改革の中心は授業改善にあるとして、授業評価は大学評価の義務付けによりほとんどの大学で実施するようになった。現在、多くの大学で組織的になされている「学生による授業評価」はアウトカムズ（結果）評価であり、総括評価ともいわれる。本稿では授業評価の実施における背景とあり方について説明する。また、本学で実施している「学生による授業評価」アンケートを紹介し、それにかかわる意図を解説し、その課題を提示する。授業評価を通して大学の教員が教育にどうかかわるべきなのかについて提起する。

### I. はじめに

現在、授業評価は日本のほとんどの大学で実施されている。そして、日本の大学における授業評価といえば、学生も教員も誰もが学期末に実施される学生による授業に関するアンケートのことだと想起するようになっている。本来、授業評価は「学生による授業評価」だけを意味するものではなかったはずだが、1998年ごろから全国規模ですすめられた大学改革と大学評価の流れの中で「学生による授業評価」≒授業評価として認容される存在となった。そして、現在では大学の外

部評価のための根拠のひとつとして欠かせないものとなっている。しかし、実施している実態はあるものの、その方法の是非や結果の検証、教職員や学生に有効に反映されているかなどを詳細に検討している報告は少ないし、関心を持つ教員は残念ながら少ない。本学でも授業評価をするという前提の元に2010年の開学時より「学生による授業評価」を実施している。こうした現状を踏まえて、改めて授業評価とは何か、その背景を概観し、その問題点と課題について考える。

\* Corresponding author:

新潟リハビリテーション大学  
〒958-0053 新潟県村上市上の山2-16  
Tel : 0254-56-8292  
Fax : 0254-56-8291  
E-mail : oshiki@nur.ac.jp

## II. 授業評価の背景と意義

### 1. 大学教育改善の流れ

授業評価のそもそもの発祥はアメリカの大学で、大学や教授陣が無制限に行使してきた権限に対して、授業料を払っている学生の権利を認めるべきではないかという主張が出てきて導入されたものであった。実施してみると教員の勤務状態を判断するのに有効であったため、教育評価の資料として用いられるようになった。日本では1974年の国際基督教大学（ICU）が最初であったが、平成に入って大学審議会がファカルティ・ディベロップメント（Faculty Development：FD）の必要性が唱えられるようになると急速に導入されるようになった。

中央教育審議会第82回総会（2012年）の報告書<sup>1)</sup>によれば、大学教育の改善について論議し始められたのは1991年（「大学教育の改善について」大学審議会）ごろからであり、大学は「学士課程教育を自らの理念に基づき組織的に提供し、それを常に改善すること」がもとめられた。その特徴的な取り組みとしてシラバス作成、学生による授業評価、FDがとりあげられた。その結果を示す調査資料が（2009年調査）表1である<sup>2)</sup>（表1）。

シラバス作成やFDは大学教育改革のシンボルとして迅速に取り組みされたが、「学生による授業評価」は教職員に抵抗感があり、基本的な理解や実施に必要な物理的な準備にやや時間を要した。しかし、教育改革の中心は授業改善にあるとしてその有効性・必要性が強く唱えられ、大学評価の義務付けによりどの大学も実施しないわけにはいなくなった。

「学生による授業評価」は大学評価・学位授与機構が定めた2005年度施行の大学評価基準の基準9「教育の質の向上及び改善のためのシステム」に授業改善とあわせて盛り込まれている。以下に示す通り、基本的観点のひとつに授業評価について明記されている。

「学生の意見聴取（例えば、授業評価、満足度評価、

学習環境評価等が考えられる）が行われており、教育の状況に冠する自己点検・評価に適切な形で反映されているか」（大学評価・学位授与機構「大学評価基準」基準9 基本的観点9-1-②）

### 2. 教育評価は何を評価するか

大学評価として、教育評価のひとつとして授業評価の実施は欠かせないことは明らかになったが、実施しているかどうかだけでなく、その内容も今後は問われることになりそうである。

教育評価は何を評価するかといえば、授業の評価以外に、教員の教育力（授業の腕前や力量）、科目評価、カリキュラム、学部や大学全体の教育プログラムなどである。具体的には育理念、スタッフ、学習環境などを評価するインプット評価や、どんな学生が育ったか、どのように目標達成できたかを国家試験や採用試験の合格率などで評価するアウトプット評価などがある。卒業生調査や就職先の施設や保護者へのアンケート調査などもアウトプット評価といえる。これらを総合したものが教育評価であり、近年はそれが大学評価に大きく反映されつつある。

授業評価は教育評価のひとつである。しかしながら、「授業評価」は往々にして個々の教員の教育力評価として受け取られやすく、教員間には抵抗感があることは否めない。各教員が教育力を発揮するためには教育研修（FD等）の機会、学習環境（教室の大きさや机やイスの配置、プロジェクターや音響機器の整備など）、受講する学生の学力や特性などの要因にも大きく左右されることを忘れてはならない。加えてカリキュラムの組み方、大学全体として教育理念の一貫性などが反映されていると考えるべきであり、決して各教員の腕前や力量に直結しているのではないというコンセンサス形成が授業評価を実施する上での大前提である。

### 3. 授業評価と教員評価

教員評価は、全国的にも実施の方向で奨められている。授業評価が教員評価に用いられる場合もある。教

表1 授業評価等の実施率

	1993年調査	2012年調査
シラバスを作成する大学	80大学（15%）	724大学（96%）
学生による授業評価	38大学（7%）	599大学（80%）
ファカルティ・ディベロップメント（FD）	151大学（29%）	746大学（99%）

員を教育面で評価する際の参考とされ、すでに教員評価を教員の給与面に反映させている大学も少なくない。教員評価の中に「学生による授業評価」の結果を加味し、Teacher of the Year とか The best teacher などの教員表彰制度を導入し、人事面に反映させている大学も年々増えている。

しかし、本学では授業評価の目的を授業改善に留めており、教員評価として用いていない。適度な授業評価をおこない人事面に活用してほしいと願う教員もいるはずである。多くの努力が報われる給与配当、誰もが納得できる人事など改善すべき一面もある。授業評価を教員評価として導入するためには、上述のコンセンサス形成を確実にを行い、授業評価のアンケート項目の信頼性や妥当性を高める必要があり、多面的評価が

できるようさらに多くの意見を吸い上げて実施すべきであると感じている。

#### 4. 授業評価の測定方法

授業評価は「学習過程の測定」のひとつであり、その測定方法には以下の2つがある。

- 1) 授業を受ける者や観察者の立場から学習の状況に対するさまざまな反応をみていくプロセス（過程）評価
- 2) 授業を受けている学生たちに生じた変化を測定するアウトカムズ（結果）評価

日本の大学では「学生による授業評価」といえば、学生アンケート方式を取り入れているアウトカムズ評価がほとんどである。

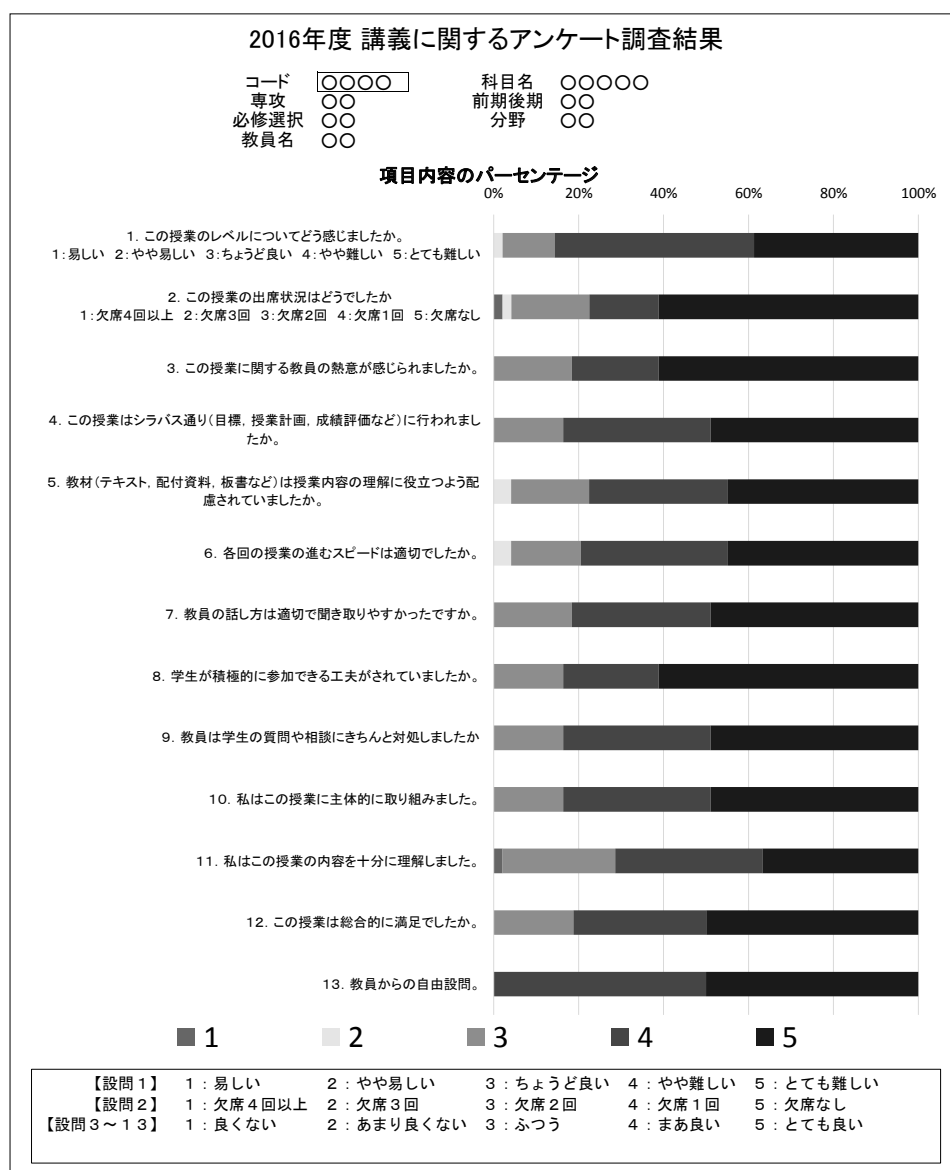


図1 授業評価結果：各教員用（例）

具体的な方法として「大学教授報入門」(1982年)<sup>3)</sup>では、以下の3つをあげている。

- 1) 学生アンケート方式：10項目程度の授業評価フォームを用いて受講生に評定させるものであり、学習過程の測定に最も広く行われている方法である。
- 2) オブザーバー（観察者）を活用する方式：同僚や訓練を受けたオブザーバーに講義を聞いて批評してもらうものである。
- 3) ビデオ撮影・再生：教授者自身がオブザーバーになる方法である。授業をビデオテープにとっておき、あとで一人で、または同僚や学生と一緒に見る方法であり、オブザーバーによるチェックよりも有効な方法とみなされている。

学生アンケート方式であるアウトカムズ評価に対して、大学でのプロセス評価である相互授業参観やピアレビューは、授業アンケートに比べてなかなか普及していない。しかし、教員同士の授業参観やビデオ撮影・再生は個別的の行われ、コメントが授業の直後に与えられることも多く、授業方法の是正・改善はすぐに行われやすいため、推奨できる方法である。

また、教員が授業中に学生に感想や質問を書かせて提出させたり、数項目の授業評価アンケートを記名式で行って出欠確認に用いたりするもの次の授業に反映できてよい。具体的・個別的であるという特徴を持ち、教員が単独で、かつ気軽に取り入れられる方法である。

### 5. 総括評価としての「学生による授業評価」

組織的になされる「学生による授業評価」は授業期間の終了間際に一斉に実施され、結果のフィードバックは数カ月後になされるのが一般的である。このような評価はアウトカムズ（結果）評価であり、総括評価ともいわれる。本学で各学期末に行われている授業評価アンケートも同様である。総括評価は統一した尺度と要領で実施されるので、他の授業、他の教員、他の

学期との比較のために有用である。また、各専攻として、学部全体としての傾向がおおよそ把握できるので、教育課程における科目配置や単位数、授業形態などの検討資料としても活用できる。

授業評価からみ導き出される数値は目につきやすいが、バラツキやその分布やバラツキも十分に考慮すべきであり、値だけで授業の良しあしや教員の力量を推し量ることは難しい。いたずらに教員間の競争心をあおらないよう、組織全体のチームワークを損なわないよう配慮が必要である。

## Ⅲ. 本学の授業評価

### 1. 本学の「学生による授業評価」

本学の授業評価は、「新潟リハビリテーション大学学生授業評価実施要項」<sup>4)</sup>に基づいて実施している。

方法は「学生による授業評価」のアンケート調査である。目的は、授業内容や方法、授業姿勢や取り組みについて履修した学生の意見を広く聴取し、その結果を授業改善に生かすことである。対象科目は原則として学部の全科目とする。

評価結果のフィードバックは各教員に対して個別に行うものと全体集計の二つに分かれる。個別にフィードバックを行うものは担当した科目の回答人数、項目別の平均得点、回答人数（割合）の分布帯グラフを示した表であり、各教員に個別に通知する（図1）。全体集計はアンケート項目「12. 総合評価：この授業は総合的に満足でしたか」を用い、各学年クラスサイズ別、専攻別、必修・選択科目別等でおこなう（表2）。

### 2. 授業評価における評価項目

授業評価における評価項目として全国の多くの大学で使用しているものとして以下の12項目がある。

- ・学生の自己評価（出席状況、授業態度、自主学習）
- ・教育施設・設備
- ・評価方法の適切さ

表2 総合評価結果：全体集計（各学年クラス規模別総合評価）（例）

	30名以下		31～60名		61～90名		91～120名		120名以上	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
1年生	4	-	4	4	3.8	4.1	3.9	3.8	3.8	4
2年生	3.7	3.9	3.9	3.8	4	4	-	3.6	3.7	3.9
3年生	4	4.2	4.3	4.1	-	-	-	-	-	-
4年生	-	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-

- ・授業の進度
- ・黒板・ビデオ等の使い方
- ・テキスト・配布の適切さ
- ・質問や発言への対応状況
- ・授業のわかりやすさ
- ・話し方
- ・授業の準備状況
- ・シラバスと実習の授業の関係
- ・授業の体系性

この12項目の中でも、授業のわかりやすさ、話し方、黒板・ビデオ等の使い方、学生の自己評価の項目は8割近くの大学が授業評価に使用している。

### 3. 「学生による授業評価」アンケートの項目と自由記述欄

本学の「学生による授業評価」アンケートの項目は図2であり、上記の内容の多くを取り入れているが、教育設備、シラバスと実習授業の関係、授業の体系制などハード面やその授業と本学の一連の教育課程との

関係性についての設問はない。授業内容や方法、授業姿勢や取り組みについて調査しその結果を授業改善に生かすことを目的とし、この評価アンケートが教員と学生の両者が授業への振り返りの機会となって、よりよい授業づくりが行われればよいとの意図である。そのため科目内での教員—学生間の授業づくりに関する質問項目に絞っている。一定期間この質問紙を継続し、その後は検討課題とする予定である。

本学では2015年度改定した「学生による授業評価」アンケート調査では質問事項13項目に加えて自由記述欄を設けて授業内容以外の感想、要望、不満等も記入できるようにした。ここに記入された内容は授業担当教員に送られ、必ず「自由記述に対する回答」を文書にてしてもらい、「学生による授業評価」アンケート調査結果と「自由記述に対する回答」は、ファイルされ期間を限定し閲覧簿に記名すればだれでも閲覧できる。(図3) 記述内容は授業内容のみならず、教育設備や受講生の構成、大学の運営など多岐にわたり貴重な意見である。今後はFDなどで取り上げ、各部署で

1～2の質問は、各質問に付記した5段階で評価してください。

1. この授業のレベルについてどう感じましたか。  
(5:とても難しい 4:やや難しい 3:ちょうど良い 2:やや易しい 1:易しい)

2. この授業の出席状況はどうでしたか。  
(5:欠席なし 4:欠席1回 3:欠席2回 2:欠席3回 1:欠席4回以上)

3～12の質問は 以下の5段階で評価してください。  
(5: とてもよい 4: まあよい 3: ふつう 2: あまりよくない 1: よくない)

3. この授業に関する教員の熱意が感じられましたか。  
4. この授業はシラバス通り(目標、授業計画、成績評価など)に行われましたか。  
5. 教材(テキスト、配付資料、板書など)は授業内容の理解に役立つよう配慮されていましたか。  
6. 各回の授業の進むスピードは適切でしたか。  
7. 教員の話し方は適切で聞き取りやすかったですか。  
8. 学生が積極的に参加できる工夫がされていましたか。  
9. 教員は学生の質問や相談にきちんと対処しましたか。  
10. 私はこの授業に主体的に取り組みました。  
11. 私はこの授業の内容を十分に理解しました。  
12. この授業は総合的に満足でしたか。  
13. 教員からの自由設問

14, 15の回答は、このマークシート用紙の裏面に記載してください。なお、「特になし」などの記入は必要ありません。

14. この授業について良かった点、悪かった点について箇条書きで挙げてください。  
15. この授業について改善すべき、と思った点と、今後取り上げてほしい内容があれば書いてください。

図2 新潟リハビリテーション大学の「学生による授業評価」の質問項目

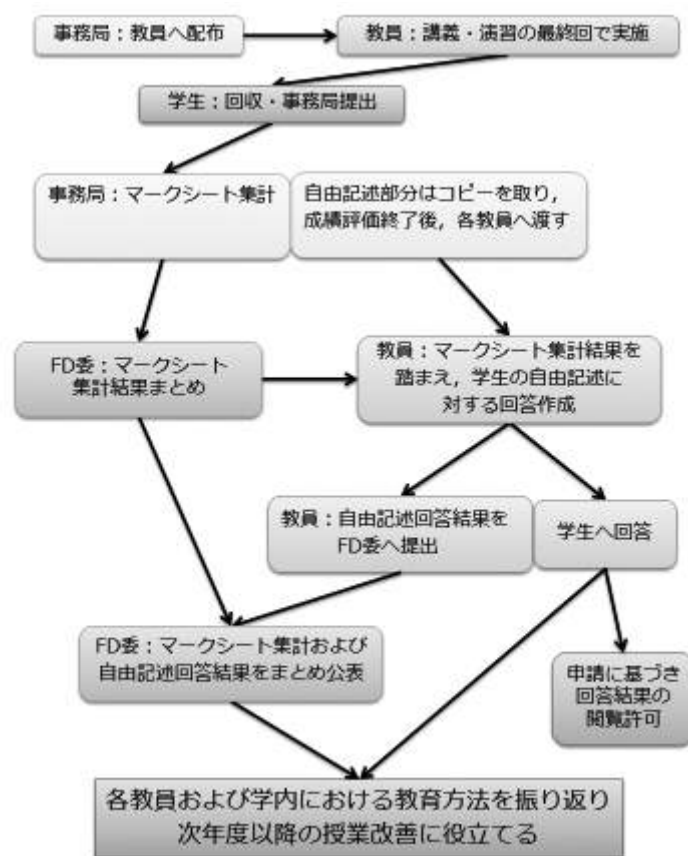


図3 学生授業評価フローチャート

改善に向けての取り組みを進めていく参考資料にしようと考えている。

#### 4. 「グッド・ティーチャー」表彰

本学では各学期に専攻ごとに「学生による授業評価」アンケートの最高得点の教員を「グッド・ティーチャー」として選出し、教授会で表彰し、その後授業公開をしていただいている。学生が高得点を付けるということはその授業に魅力があることは確かであり、教員が授業改善を意識し努力している証である。「グッド・ティーチャー」には受賞後授業公開をお願いしている。多くの教員は「グッド・ティーチャー」の教材の使い方、話し方、授業構成等を直接見ることで、自分の授業改善のヒントを得るはずである。今後は自発的に教員間の相互授業参観やピアレビューが行われることを期待しての取り組みである。このような意図が「グッド・ティーチャー」表彰には含まれており、表彰自体が主目的でないという理由を強調するために、他大学で多く用いられている「ベスト・ティーチャー：Best Teacher」ではなく、本学では

「グッド・ティーチャー：Good Teacher」と命名した。

#### IV. 教員が受けてきた教育の違いと授業評価の意義

小・中・高等学校の教師らは、教員資格を取るうえで教育原論や教授法を学び、教育実習も受けている。卒業後も自らの模擬授業を他の教員に見てもらって評価やコメントをもらう取り組みも絶えず行われており、彼らはプロセス評価を受け慣れているし、その必要性を十分認識しているように思われる。

これに対して大学の教員の任用にあたっては、自らの専門領域の専門性が重視され教育経験年数は考慮されるものの、その内容や業績についてはほとんどない。大学教員に採用されれば教員がその日から手探り状態で教育を始めることになる。この問題を打開するために文科省が提示した大学教育の改善策がシラバス作成、学生による授業評価、FDであり、ほとんどの大学で取り入れられるようになり、一定の効果は上がっていると思われる。しかし、その取り組み内容は各大学によって異なり、取り組む態度は各教員の熱意によって違いがある。これは小・中・高等学

校の教師と大学の教員の養成システムの相違とそれに伴う教育文化の相違に他ならない。大学進学率が50%以上となり、高大連携の教育が求められている現状で、大学教員にはこの認識が必要である。

理学療法士（Physical therapist：PT）、作業療法士（Occupational therapist：OT）、言語聴覚療法士（Speech therapist：ST）等医療関係職種の養成や卒業後研修などでは各専門分野のエキスパートによる理論や技術伝達を目的に行われることが多い。このような技術研修では、受講者同士の技術練習やプレゼンテーションがよく行われ、お互いの評価やコメントのやりとりも活発である。しかし、大学という教育職場では自分の授業づくりにあたって他の教員に見てもらいコメントをもらう機会は少なく、このような文化構築もなされていない。あってもきわめて例外的である。「教育」を学んできた教師と自らの専門性を評価されて教員になった大学教員で違いがあることは否めない。専門知識や技術を一方的に伝授する時代は終わり、今や様々な教授法を駆使した教育の在り方を模索することが大学自体にも各教員にも求められている。その成果や必要性を測定する方法の一つとして「学生による授業評価」があると考えればその実施は意義あるものとなる。

## V. 授業評価の現状と今後の課題

### 1. 3つのポリシーと授業評価

文科省中央教育審議会大学分科会（2016年3月）の報告書<sup>5)</sup>によると「学士課程教育において、大学の個性化・特色化を推進していく上で、個々の大学が、学生の視点に立ってディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーを明確にし、それらを相互に関連付けて運用していくことが重要である。」としている。

具体的にはこの3つのポリシーを各専攻の教育課程に配置されている授業に反映させることが推奨されており、今後大学評価の視点となる可能性が大きい。授業を担当する教員がシラバスを作成するにあたっては、大学全体や学部の人材養成の目的や目標、各専攻で育成すべき学生の資質や学習成果を明確し、それに直結するような授業づくりが必要である。このような背景のもと、本学では今後もシラバスやカリキュラムマップの完成度を増す努力が必要である。このような基盤整備が十分に行われて初めて「授業評価」の真価が問えるのだろう。

### 2. 大切な授業時間をつぶしてまで授業評価を行うのか？

「総括的評価では授業改善につながらない。」「大切な授業時間をつぶしてまで、毎学期、すべての科目で授業評価する必要があるのだろうか」「そもそも大規模クラス授業やハード面が改善されなければ授業評価は意味ない。」などの教員の意見は本学にかぎらず多くの大学で聞かれている。また、授業評価は大学評価と強く結びついているので、手間と時間をかけてもしないわけにはいかないという短絡的、かつ率直な意見もある。しかし、今まで本稿で述べてきたように、何よりも授業評価が授業改善に結びつくよう最大限の組織的努力を払うよう文科省から要請されていると考えれば前向きな努力ができるのではないだろうか。この努力はかならず大学教員として一人一人の実力と自信に、そして実績になる。

### 3. 授業評価は簡単なことではない

米谷らの研究<sup>6) 7)</sup>によれば、授業評価アンケートの分析により以下のことが分かったことは興味深い。

- 1) 学生が自主的に選択した科目の方が評価が高い。さらに、学生が担当教員が自分たちへの関心を持ち、理解度を把握してくれていると思っている方が高く評価される。
- 2) メディア（スライドの見やすさ、教室の照明など）の良しあしよりも授業自体の内容や方法の方が満足度に大きな影響を及ぼす。
- 3) 授業理解は授業の進度や出席に比較的大きな影響を受けるのに対して、総合判断（有用性：ためになるか）は教員の学生に対する接し方、熱意、私語注意などが大きく影響される。

以上のことから授業評価には評価項目の信頼性や結果の再現性を低下させる多面的な要因があることがわかる。よい授業とは何かを図るのはそう簡単なことではない。何を測るための評価なのかを定め、それに相応する基準や指標を設けることが望ましい。計画的かつタイムリーに変更・刷新を図ることは多くの大学で行っていることだが、教員がこれまでの歩みを振り返り自分の成長を確かめるためには継続性も重要である。年ごとはマイナーチェンジに留め、一定期間を経た後にふり返りを行い、授業評価自体の効果検証をすることも重要である。

## Ⅵ. 終わりに

授業評価の必要性和課題について述べた。授業評価の到着点は教員が学生に関心を向け、学生の声が授業に反映させようとする姿勢の高揚である。授業評価はどんな学生や分野にでも合う標準的で画一的な授業をつくりあげ、品質管理をすることが目的ではない。学生の反応を確かめ、ニーズを探りつつ、大学の理念やディプロマポリシーに照準を合わせたテーマや教材を準備し、試し、作り上げる努力が求められる。こうした授業造りの姿勢が蓄積されることによってはじめて授業評価が授業改善に結びついた有意義な事業となる。

あえて加えるなら、授業評価をすることが経営陣と教員組織の信頼関係を害していないか不安がある。授業評価には今まで述べてきたような背景と状況がある。教育環境や授業をめぐる様々なジレンマに対して教員が自信と誇りをもって対処できるような環境が用意されているだろうか。実施にあたっては大学の構成員が同じ目標と価値観をもって協力し合う体制が重要である。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、新潟リハビリテーション大学 FD 委員会評価部会の方々にご協力いただいたことに深く感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 文部科学省中央教育審議会第82回総会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～障害学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ＝（答申）」平成24年8月28日
- 2) 山村千絵「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～共通理解のために～」新潟リハビリテーション大学 SD 資料, 2014
- 3) ロンドン大学・大学教授報研究部（喜田村・馬越・東 訳）「大学教授法入門—大学教育の原理と方法」玉川大学出版, 1982.
- 4) 新潟リハビリテーション大学「学生による授業評価」実施要項, 2015.
- 5) 文部科学省中央教育審議会大学分科会教育部会「卒業認定、学位授与の方針（ディプロマポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）、入学者受け入れの方針（アドミッションポリシー）に関する策定及び運用に関するガイドライン」平成28年3月31日
- 6) 米谷淳「授業改善に関する実践的研究2、授業に対する学生評価」大学教育研究4, 15-28. 1996.
- 7) 米谷淳「授業改善に関する実践的研究5、学生の授業評価とメディアの効果」大学教育研究9, 41-59. 2001.